

広汎性発達障害における状況画の認知について (その2)

宮脇 修

Cognition of Situational Pictures on Pervasive Developmental Disorders

Osamu MIYAWAKI

1 目 的

自閉性障害をになった人たちが、いわゆる‘同時失認’ (状況画の細部を正しく認知しうるが、全体の意味を把握できない症状) の傾向をもつことは、これまでの諸研究でよく知られている。^{1), 2), 3), 4)}

この‘同時失認’ (simultanagnosia) という概念は、J. Wolpert が1942年記載したのが始まりのようであるが、⁵⁾ここでは大橋 (1965) が視覚失認を6分類している中の同時失認を、もっとも近い概念としてとり上げた。

ちなみに大橋は、視覚失認を①物体失認、②相貌失認、③同時失認、④色彩失認、⑤視覚失認性失読、⑥視空間失認の6つに分けている。

失認という症状は、情動的・心理的要因によって起きることもあるという心理学的説明もあるが、ここでは大橋も述べているように、精神医学的なとらえ方をもとにして、脳の機能的不全によるものと解釈する。

研究報告その1では、5枚の状況画を使って、広汎性発達障害と精神遅滞それに健常幼児のその反応状態について比較研究を報告した。

その結果、広汎性発達障害をになった児童・生徒と精神遅滞それに健常幼児との間に統計的に有意な差がみられ、広汎性発達障害の場合状況画への同時失認状態があきらかに高いことが判明した。(統計的処理の方法としては、non-parametric 法 Kendall の τ を用いた。こうした場合推計学による有意差の検定の必要さに、ある種の疑問をもったがあえておこなった。筆者の気休めに過ぎないと思われる点がある。⁶⁾)

今回の研究報告その2では、広汎性発達障害をになったある事例について、状況画への反応を同時失認に焦点をあてつつ考察する。

2 方 法

(1) Case-Study の対象について

これまで13年間人間的つき合いを持ち、多くのことを教えられてきたF氏の、(現在23歳) 発達過程を事例研究の対象とする。

F氏が小学校5年生の段階から今日まで、本人とそこそこの両親と筆者とのあいだには、その療育活動を巡って、共同療育者のなかかわりをもってきた。

(2) 同時失認にかかわる調査について

前回の報告に、刺激図としての5枚の図版を載せたが、事例研究をより明確に報告するためにも、その図版を再度記載した。

この図版は水戸市在住の五藤義行氏によるものである。

図版作成の観点として、筆者は次の5条件を設定した。

- ① 時間的系列が自然に類推できること
- ② 画面の中には無視しなければならぬものを付け加えること
- ③ 画面の中に、何か関連のあるものが自然につかめること
- ④ 登場している人物の感情・動作が自然につかめること
- ⑤ 日常的に経験しやすい場面とそうでない場面とを用意すること

また、状況画に反応した言語表出を評点化するため、表1のような基準を設定した。

表1 状況画への言語的反応の評点化基準

評価点	反 応 の 言 語 的 内 容
3点	登場人物のすべてにわたって説明があり、全体の状況が把握されている。
2点	登場人物については一部だけしか説明しない。しかし、状況画の中心的意味はつかんでいる。
1点	登場人物の一部のみに反応している。状況画の全体像が把握されていない。
0点	状況画の意味がまったくわからない。画面(場面)の中の事物の命名とか、状況とまったく関係のない単語をおもいつくままに言う。

図版の5枚に対して、一対一の面接という条件で、「この絵を見て下さい。この絵についてお話をして下さい。この絵はどういうことについて描いてあるのでしょうか。」と設問した。その設問に対してかえてきた言語的応答をメモした。

もし、だまってしまってもすぐに応答できあへない場合には、しばらく待ってもう一度同じ設問を試みた。被験者の自発性を大切にして、その表出言語を引き出すようにした。

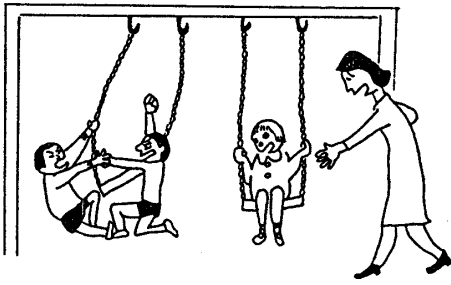
3 F氏の生育史

(1) 家族構成

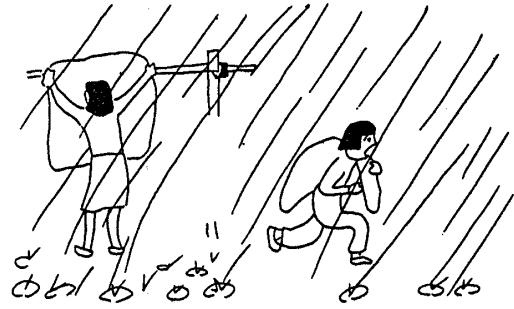
父、母、兄、本人・・・本人の21歳時義姉(兄の配偶者)が加わる。(1991)現在、本人23歳、兄夫婦は同じ敷地内の別棟で暮らす。食事などは一緒。

(2) 生育歴(その1)

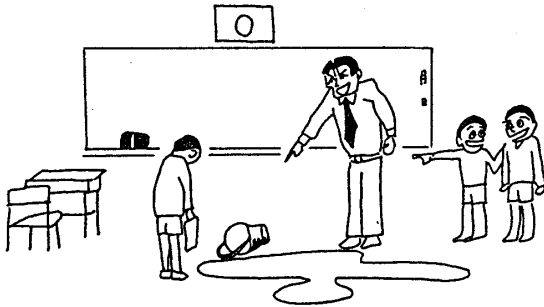
- a 出産は正常。出生時体重3320g。身長52cm。
- b 初歩11か月、満1歳の時、町の健康優良児に選ばれた。



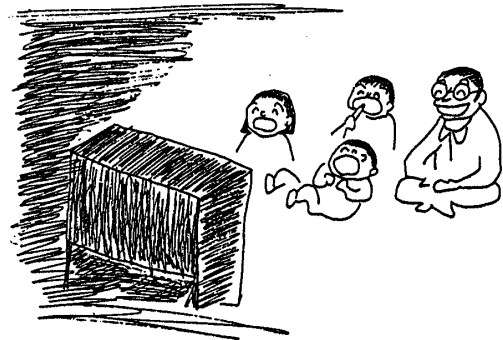
図版1 (ブランコ)



図版4 (雨と布団)



図版2 (水をこぼした子)



図版5 (テレビ)



図版3 (川でおぼれる子)

- c 満2歳頃になって、表情が乏しくなり、呼んでも振り向くことがなかった。
- d その頃からTVのコマーシャルに固執して、化粧品のメーカーなどの言葉をはっきりした構音で言うが、会話としての言葉はまったく成立しなかった。
- e 遊び方も普通の子と異なって、母親の化粧品やNHKの許可証マークなどに関心をもった。そして、それらをきちんと同じ方向に並べることに執着した。
- f 物を一定の方向に順序よく並べることにこだわって、気に入るように並べられないと、パニック状態になった。
- g 抱いても固い感じで、からだを寄り添う状態がなかった。
- h 3歳の時保育園に入所。集団生活に入れず、指示もわからず、多動の状態が続く。園をふいにぬけでていくことも多く、偏食が特にひどかった。食べるものといえば、パン、うどん、ビスケットぐらいで、しかも熱くなければ食べなかった。
- i 3歳時、三重県あすなろ学園にてS医師に自閉症と診断され、療育相談については、S医師から、住まいに近い県立高松病院T医師を紹介される。
- j 近くの児童相談所で遊戯療法を一週間に一回受ける。
- k 少しずつ集団の中の生活に慣れはじめる。
- l 児童相談所のケース・ワーカーのすすめもあって、就学相談をうける。

(3) 生育歴 (その2)

- a 就学猶予1年の後、地元の小学校の通常学級へ入学する。
- b 金沢市内の小学校情緒障害学級に1週間に1度治療的指導を受ける。
- c 授業中教室の中を歩き回っていたが、次第に教室の中で落ち着くようになってきた。
- d 情緒障害学級を有効に利用することによって、また通常学級担任の努力も手伝って、集団生活に慣れ、不適応行動が少なくなってきた。
- e 4年生頃から、一部記憶に関する学力は他の児童についていけるところもあったが、読解力や文章題テストなどに対応する力に格差がはっきりみられるようになった。
- f 5年生の夏休みに、小学校担任教師群と児童相談所のケース・ワーカーが中心となり、自閉症の症例研究会「MAKOTOの会」がスタートする。
- g 「MAKOTOの会」は、F氏に関わる教師、医師、サイコロジスト、ケース・ワーカー、保母、地域社会の人々などが定期的に集まって事例会議を持つ自由な集まりである。集まってくる人は毎回20~50人で、オーガナイザーはF氏のご両親である。
- h 6年生のとき、中学への進学を巡って2回にわたり、適正就学に関する事例会議を開いた。町教育委員会の主催する会議ではないが、中学校の校長・教頭それに特殊学級の担任そして児童相談所のケース・ワーカー、筆者も参加して、中学校側の受入れ体制に検討を加えた。

(4) 生育歴 (その3)

- a 中学校へは通常学級に入学し、情緒障害学級を十分活用することをとりきめた。
- b 情緒障害学級へは1日に1回通級し、個人教育プログラムにもとづいた個別指導を受ける。個人教育プログラムは、「MAKOTOの会」で検討されたものである。
- c 部活動は陸上競技部に所属し長距離走に頑張る。1年9カ月の練習結果、縄跳びを習得。
- d 中学2年生の時、切り絵のてほどきを受け、余暇の善用というかたちで切り絵に熱中する。これが本人の励みとなり、個人教育プログラムの重要な課題と発展する。
- e 2年生後半、クラスの中で自分の置かれた立場を気にするようになり、不適応行為が少し出てきた。
- f 不安定な感情をはらみつつ、高校進学を口にするようになった。
- h 修学旅行の時、グループでの自由行動は、飛鳥の里(奈良)を自転車で散策することであった。本人は、それに備え自宅の回りで一週間の自転車練習を行い、ついに乗れるようになった。そのことが本人に強い自信を与えた。
- i 「MAKOTOの会」では、感覚統合に関する訓練プログラムを中学校段階でも重視した。言語に関わる学習とともに、その課題の訓練に力を入れ町立体育館の夜間利用を継続した。
- j 3年の後半に、県立農業高校へ進学したいという本人の希望を重視し、受験勉強を行う。「MAKOTOの会」では、中学校3年担任、高校教諭、高校教頭などが参加して、進学問題が検討された。
受験の結果不合格となる。心理的にかなり落ちこむ。母親に頼み自家用車で遠くの海を見に行く。フラストレーション解消の行為とも解釈される。
- k 「MAKOTOの会」でも話し合わされた結果、本人の高校入学希望を満たすよう県立定時制高校を受験させる。K高等学校に合格する。

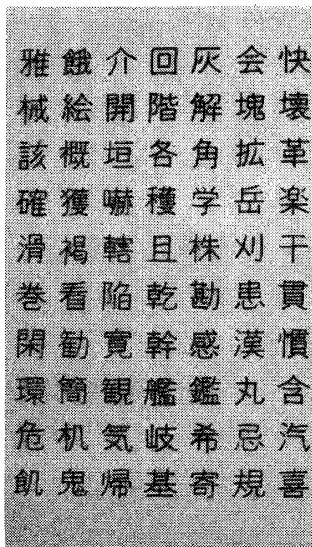
広汎性発達障害における状況画の認知について (その2)

(5) 生育歴 (その4)

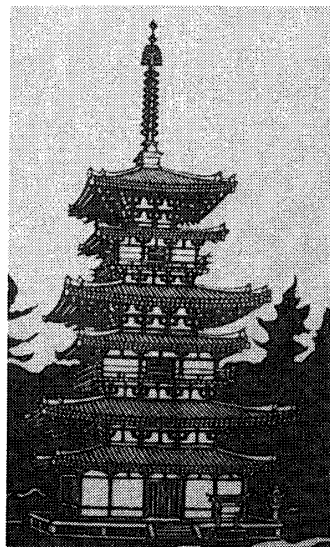
- a 高校1年時の体位・・・身長177cm, 体重70kg, 均整のとれた身体。
- b 自転車で通学する。全般的に落ち着いている。常動行動や自傷行為などはみられなかったが, 興味・関心のあることについては, くり返し口にし, 何度も同じ質問をする。
- c 高校の4年間一日も休まず通学する。
- d 2年生の時, 同じ中学校から進学した生徒のいじめに会う。
- e いじめに会ったことについては, まったく親に言わなかった
- f いじめを乗り越えていったのは, 中学時代から訓練を受けた切り絵の製作活動であり, 「MAKOTOの会」に参加している高校教師集団の支えであった。
- g 切り絵は, 本人の几帳面さが背景となって, 専門家からの指導も加わり加賀友禅染めの下絵の切り絵まで発展する。
- i 高校の卒業文集表紙は, F氏の製作による切り絵でかざられた。
- j 「MAKOTOの会」による事例会議は本人の高校卒業まで, 高校教師, ケース・ワーカーなどを中心に継続された(3か月に1回の割で)
- k 本人の卒業を記念して, 地元の展示場で「切り絵」の個展が開催され, 多くの人から注目を浴びた。地元の新聞社, TVが記事にとりあげる。

(6) 生育歴 (その5)

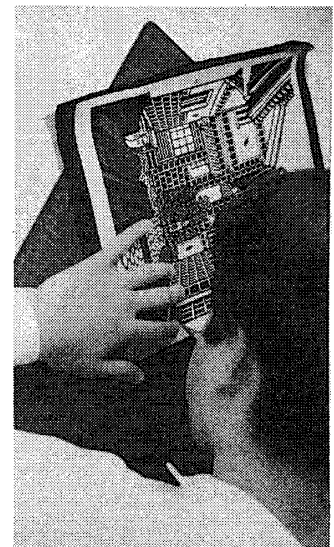
- a 卒業と同時に地元の繊維会社につとめる。繊維会社では, 製品を入れるケース作り(大型ダンボール箱の組み立て)を担当している。
- b 会社では, 予告なしの超過勤務にも問題なく対応できる。
- c 無遅刻, 無欠勤で真面目に勤務したことにより, 社長表彰(皆勤賞・精勤賞)を受ける。
- d 兄の結婚式披露宴で, カラオケによる歌曲を堂々と歌い, 参加者に感銘をあたえる。
- e 21歳時「十亀記念賞・特別賞」を受賞する。
- f 22歳時の身長180cm, 体重75kg。



中学校2年時の漢字練習帳の一部(本人が書いた文字)



高校時代に制作した切り絵



切り絵制作中のF氏(高校時代)

4 諸検査の結果

(1) 知能検査 (WISC-R) と ITPA

ここでは、発達指数を算出するというより、1987年、F氏16歳時の知的発達や言語的発達の状況(特徴)をとらえようとした。⁷⁾

図1 WISC-Rの診断プロフィール (1987, 5実施)

(下位検査) (粗点) (評価点)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
言語性検査	知識	9	1	*																
	類似	11	4		*															
	算数	7	1	*																
	単語	13	1	*																
	理解	5	1	*																
	数唱	20	12	*																
動作性検査	絵画完成	16	3		*															
	絵画配列	7	1	*																
	積木模様	59	11									*								
	組み合わせ	28	10								*									
	符号	67	11									*								
	迷路	30	16																	*

図2 ITPAのプロフィール (1987, 5実施)

発達年齢	10:6	9:6	8:6	7:6	6:6	5:6	4:6	3:6									
	10:0	9:0	8:0	7:0	6:0	5:0	4:0	3:0									
評価点	64	60	56	52	48	44	40	36	32	28	24	20	16	12	8	4	
言葉の理解		*															表象
絵の理解						*											
言葉の類推					*											水準	
絵の類推		*															
言葉の表現															*	自動	
動作の表現									*								
文の構成													*		水準		
絵さがし			*														
数の記憶			*														
形の記憶						*											

広汎性発達障害における状況画の認知について (その2)

(2) 同時失認に関する状況画への反応

表2 状況画への言語反応 (枠内の数字は認知得点を示す)

その1

	12歳時面接	16歳時面接	20歳時面接	22歳時面接
図版1 ブランコ	<p>ブランコ, ブランコに乗る。ブランコで喧嘩した。 お母さんが話した。</p> <p style="text-align: right;">2</p>	<p>ブランコに乗った。 お母さんが手でブランコを離した。 私がブランコに乗った。 二人がブランコをいたずらしたから怒られた。</p> <p style="text-align: right;">2</p>	<p>二人がブランコで喧嘩をしています。 一人だけブランコをしています。 お母さんが手をつなごうとしています。 ブランコを降りようとしています。</p> <p style="text-align: right;">2</p>	<p>二人が喧嘩をしている。 ブランコにすわっている。 お母さんが立ち上がっている。 ブランコが曲がっている。(喧嘩しているブランコの鎖を指でなぞりながら)</p> <p style="text-align: right;">2</p>
図版2 バケツ	<p>水がこぼれた。 先生が洗う。 二人が見る。 雑巾で拭くのを見とる。</p> <p style="text-align: right;">1</p>	<p>水がこぼれた。 雑巾で拭く。 二人で見ていた。 先生が私で雑巾を拭いて下さい。 私が雑巾を拭いて下さい。</p> <p style="text-align: right;">1</p>	<p>教室の中でバケツに水がこぼしてあります。みんなは迷惑です。水がこぼれたのを雑巾で拭いとる。 水こぼれたのを見とる。 視察しとる二人は笑とる。 子ども二人は笑とる。</p> <p style="text-align: right;">3</p>	<p>「ウフ・・・」 (図版を見て, おかしがって笑う) 教室の中に水がこぼれている。男の子が雑巾で拭こうとしている。 二人がこぼれたのを見て笑っている。 黒板や机や椅子が置いてある。</p> <p style="text-align: right;">3</p>

表3 状況画への言語反応 (枠内の数字は認知得点を示す)

その2

	12歳時面接	16歳時面接	20歳時面接	22歳時面接
図版3 川	お水。泳いだ。 二人追いかけた ・・・一人の、が んばれ。 0	僕が泳いだ。 二人で追いかける。 一人で遊んだ。 0	にんげんが川で泳 ごうとしています。 二人は川へ上ろう としています。一人 は見ようとしていま す。 釣竿を置いたまま です。 0	川で溺れています。 3人が立ち合って助 けようとしています。 釣りをしていた後 に溺れた。 3
図版4 ほしもの	雨の絵。 布団を乾く絵。 布団を部屋に置く、 雨。 0	雨降る。 選択洗い、布団上 げ。 一人で布団を持っ た。 一人で布団を干し た。 1	雨が降っているの で布団を持っていき ました。 二人とも、雨降っ ていますので、布団 を持っていきました。 家の中へ持ってい きました。 2	外は雨が降ってい る。 お母さんが布団を 部屋に入れようとし ている。もう一人の 人も布団を部屋に入 れようとしている。 雨が降っている。 3
図版5 テレビ	テレビを見る。 4人で家族で見る。 お父さんと子ども3 人4人で家族で見と る。 1	4人でテレビを見 ていた。 お父さんとお母さ んと僕と私と4人で テレビを見ました。 2	テレビを見て笑っ ています。 一人だけガムを食 べています。 4人とも笑ってい ます。 3	男の子はテレビを 見ながら、菓子など を食べています。 他の3人はテレビ を見て笑っています。 3

5 結果の考察

(1) 諸検査の結果から

16歳時の知能測定は、事例該当者の知的・言語的発達の概況を知るため、標準的な指数を出すものではないことは、先に述べたとおりである。

しかしながら、このプロフィールをみるかぎり、その知的発達の特徴を表しているように思われる。いわゆる個人内差異をとらえるという点で、指導に関して参考となる。

WISC-Rでは、動作性と言語性の両者間の明らかな discrepancy をみる。

下位検査において、数唱（言語性）、積木模様、符号、迷路（動作性）など、他の下位検査として比較してきわめて高い評価点を獲得している。特に迷路にいたっては SCORE は16を示しているのが特徴的である。このことについては、太田⁸⁾⁹⁾等の研究でも、比較的高い言語機能を有する自閉性障害者には同じような結果が出ていることを報告している。熊谷¹⁰⁾もまたその知的構造のアンバランスについて事例報告を行っている。熊谷の場合、事例報告でT君のケースを挙げ、WISC-Rのプロフィールを紹介しているが、F氏のプロフィールとほとんど同じ型であることに驚きを感じる。

次に、ITPAに目を転じてその発達年齢・評価点の各能力間の個人内差異に注目してみよう。表象水準・自動水準いずれにも、各能力の対に discrepancy がみられる。

一般に、非言語系が言語系よりすぐれている場合では、だいたいその傾向で一貫することが多いが、この場合ではそういった傾向性がまったくない。

たとえば、受容能力においては「ことばの理解」が「絵の理解」よりもずっと高い SCORE を示し、連合能力になると「ことばの類推」が「絵の類推」にかなり低い SCORE を示すという状態がみられる。

表現能力では「ことばの表現」「動作の表現」ともに落ちこんでいる。この場合でも「動作の表現」やや優位である。

一方、自動水準の構成能力では、「文の構成」は「絵さがし」に対比して SCORE が低く、配列記憶能力になると「数の記憶」が「形の記憶」に対比して SCORE が高くなっている。

ITPAの診断ではっきり言えることは、理解言語はある程度育っているが、表出言語の方がそれにともなっていないという状態像である。さらに加えるならば、数にかんする機械的記憶が他をぬきこんでいるということである。

言語的能力は、生活年齢の増加とともに伸びてきているが、発達の全体的な傾向とでもいった各能力内の対比 discrepancy は、今日23歳時においても、16歳時測定の特徴が依然として内在しているように感じられる。

16歳以前にも3回ほどWISC知能検査を行ってみたが、注意の集中がみられなかったり、途中でテスト場面から逃避したりして、一貫して検査が行えない状況が続いた。

(2) 状況画への言語が反応の結果から

状況画への言語反応テストは、研究方法でも説明したように、1対1の面接で、12歳、16歳、20歳、22歳、4回にわたり実施した。

表4、表5は刺激図を見せて反応したことばをメモしたものである。

各欄内にある数字は、認知得点を示している。得点の評点化の基準は表2で説明した。

評点化の試みは、発達の状況・傾向を何らかのかたちで比較化・客観化したいという意図によるものである。この際の数値には考察の段階であまり大きな比重をもたせない。

ここでは、この評点の変容を考察の対象にしつつ、状況画への言語的反応の一欄ごとに質的な検討を加えていきたい。

① 状況画の言語的反応評価点の変容について

とりあえず認知得点を測定年次順に表4に並べてみよう。

表4 状況画への反応評価点（認知得点）の変容

測定年月日	図版1	図版2	図版3	図版4	図版5	評価点合計
1983.12 (12歳)	2	1	0	0	1	4
1987.1 (16歳)	2	1	0	1	2	6
1990.10 (20歳)	2	3	0	2	3	10
1992.8 (22歳)	2	3	3	3	3	14
図版毎合計	8	8	3	6	9	

- i) 図版1～図版5の認知得点を眺めると、図版3が他に比較して著しく評点が低い。このことは、図版3の状況画が日常的にほとんど体験することのない情景だからそういう結果が出ているとも考えられる。その点図版5は日常的に目に止まりやすい情景でもある。
- ii) 生活年齢の上昇につれて、認知得点が高まっている。これは、CARS (THE CHILDHOOD AUTISM RATING SCALE) などから評定される自閉度の軽減との関連で考えるよりも、生活的な体験の豊かさ、表出言語の広がりによって結果であると常識的に判断した方が望ましい。
- iii) 特に、16歳では状況画の情景がまったくつかめられていないのに、20歳ではその可能性がでてきている。
- iv) 22歳の場合、図版3において著しい発展がある。この年齢はF氏が社会参加してからのことである。この事例からも、自閉性障害をになった人の成人以後の発達可能性を否定的にみることに問題があると思う。
- v) 発達には個人差というものがあるが、F氏の場合はこのような反応結果をみたが、他の事例の場合このようにいくのかどうか、その点は不明である。
- vi) F氏の場合、社会参加することによって、状況画への反応をよりよくしたことを説明したが、その因果関係は不明である。ただ、社会参加によって社員旅行へ参加したり、昼食を一緒に食べたり、仕事のうへで質問したりするという実際生活での報告をきくと、生活体験の幅を広げたことが、結果として状況画への反応を、より確かなものにしたものと考えられる。

又、家庭で両親との積極的な談話の機会を持ったことが重要な要因と考えられる。

- vii) 図版への言語的反応から、十代での WISC における言語性検査の試行には、かなり無理が伴っていると考えられる。
- viii) 認知得点評点化の試みは、先述したように表 2 に挙げた基準にてらしあわせて行っている。したがって、反応のことばに在る品詞の増加、言い回しのゆたかさなどは、評価の観点からはずされている。

② 状況画への言語的反応の分析

- i) ①で状況画認知得点の変容について述べたように、20歳までの言語反応には、状況画の意味がほとんどつかまれていると思われ。
- ii) 16歳未満では、全般的に画面中の事物の一部、事象の断片的反応が多く、格助詞の誤用が目立つ。熊谷¹³⁾は、比較的高い言語機能をもった自閉性障害者の中には、助詞をかなり使用するが、その適用に問題のあるケースが多いことを指摘している。
- iii) 20歳になると、言語的反応がゆたかになってきて、格助詞の混用がみられなくなっている。F氏の発達のペースからながめると、いわゆる「言葉」の急速な伸びが感じられる。
- iv) しかしながら、20歳の段階でも図版3に関しては、状況画の意味がまったくつかまえていない。
- v) 図版2、5に関しては、画面に日常性がみられるという点から、その状況画の意味がつかまえてられている。
- vi) 22歳において、図版1を除きはっきりした発達が何われ、図版3では大きな進歩がみられる。
- vii) 各図版ごとの特徴を挙げてみると次のようである。
 - a 図版1・・・部分的にはよく分かっているが、画面で母親か先生らしき人が、喧嘩している子どもに、注意をしているところへ視点が生まれてこない。
 - b 図版1・・・20歳の時から「手をつなごうとしている」「降りようとしている」など、推量の接続助詞が出てきている。
 - c 図版2・・・「雑巾で拭こうとしている」
図版3・・・「立ち合って助けようとしている」
図版4・・・「入れようとしている」
などと、句と句との結び目に関わる接続助詞が使えるようになっていくことは、「言葉」の発達上高く評価できる。(22歳)
 - d 図版5・・・「テレビを見ながら」(接続助詞)
「菓子など」(副助詞)
などの使用は注目すべきである。
特に「・・・ながら」の使用は、句や文の終止にかかわって判断の変化を示すとともに感情的色彩を帯びていくという点で、この用語の出現は重要である。
 - e また図版2において、図を見て「ウフ・・・」とおかしがっている。この笑いの部分は「二人がこぼれたのを見て笑っている」という説明に結び合わせて考えると状況画のポイントを明確に把握していると思われる。

③ 状況画への言語的反応についての考察

- ①、②でおこなった同時失認の状況を整理してみると、次のような結論が得られる。

- (a) F氏の同時失認の状況は、刺激図(図版1～5)に関するかぎり、16歳以降に漸次発達の様子がみられ、20歳・22歳の段階では、表出することばの増加とあいまって、同時失認の状態が消去しつつある。
- (b) 自閉性障害者のはなしことばにおいて、動詞の使用については、熊谷¹²⁾も指摘しているように、「状況を表すために動詞を中核とした意味論空間を頭の中に十分構築できない」傾向がある。しかしながら、F氏の場合動詞の使用が十分であるため、意味論空間を体験的にゆたかにすることによって、表出ことばの発達を促進することが期待される。
- (c) 助詞の使用がたしかになりつつある。しかも漸次増加の傾向を感じる。したがって、F氏との対話の機会を多くして、表出ことばの増加を図ることが望まれる。

6 今後の課題

これまで状況画の同時失認という問題に関して、ある一人の人物を通してその変容過程を報告してきた。生育史については紙面のゆるすかぎり取り上げてみた。

ここでは、同時失認を十亀¹³⁾、小林¹⁴⁾等の方法に準拠して漫画による刺激図を用意してみたが、視覚的に他の方法によってキャッチしていく必要を感じた。

また、表出ことばを手がかりに考察をすすめているのであるが、筆者等が感知し得ないF氏の非言語的表出がそこには在ったと思われる。その時そこに潜んでいるF氏の情動や意志の世界に共感し得る、筆者側の能力があったならば、別な分析を可能にしたかもしれない。

いずれにしても、この報告は、状況画を通して「同時失認」の傾向を知ることが第一義的課題であった。

紀要第38号で報告したように¹⁵⁾自閉性障害をになった人たちには、状況画を見てある独特な認知を示す。IQが130を示すある12歳の女子は、同時失認に関する本研究と同じような刺激図を見て、個々の人物の説明を正確すぎるほど細かに行うが、状況の全体を意味ある一つの情景として説明できなかった。

このような特徴は精神遅滞を示す人たちにはみられない。

小林¹⁶⁾は、自閉性障害をになった人が、自閉度の改善にもかかわらず、状況画の登場人物の表情や思考などを把握することが困難で、てがかり刺激として背景の事物を活用することが特徴的所見であると指摘している。また、状況画の内容が状況のあいまいさを強めると、その認知的反応は著しく困難になってくると説明している。

さて、ことばであれ行為であれ、それが引き起こされるとき、そこには何らかのかたちで、状況的なコンテクストが背景に働いている。だから、状況画の説明ができるようになったからといって、状況認知が可能になっているとは考えない。

この報告は、あくまで「同時失認に関わる状況画への言語的反応の一事例」であることを確認しておきたい。

*この研究をすすめるに当たって、F氏とその御両親に、共同療育者としてともにすすみ、いろいろと御配慮をいただいたことに対し厚く御礼申し上げます。また、資料提出について御協力下さった金沢大学の山田三千代さんに謝意を表したい。さらに、状況画の作成者五藤義行先生(水戸市)に対し改めて感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 小林隆児他：言語像からみた年長自閉症児者に関する精神病理学的考察 児童精神医学とその近接領域 23; 235-260 1983
- 2) 小林隆児他：自閉症における自閉性と認知障害に関する研究 (第1報) 安田生命社会事業団研究紀要論文集 25; 48-58 1989
- 3) Baron-Cohen, S : Social and Pragmatic deficits in autism cognition of affective? J. Autism, Develop. Dis.,18 ; 379-402 1988
- 4) Simon Baron-Cohen, Alan M. Leslie and Uta Frith : Mechanical, behavioural and Intentional understanding of picture stories in autistic children British Journal of Developmental Psychology 4.113-125 1986
- 5) 加藤正明他：精神医学事典 230-231 弘文堂 1975
- 6) 岩原信九郎：新しい統計ノンパラメトリック法 日本文化科学社 1955
- 7) 山田三千代：自閉症児に対する漫画指導 (状況認知と意味理解促進のために) 15-18 金沢大学卒業論文 1987
- 8) 大田昌孝：自閉症の認知障害 125-136 自閉症の研究と展望 東京大学出版局 1987
- 9) Bartak, L. and Rutter, M: Differences between mentally retarded and normally intelligent autistic children J. Autism Child. Schizophr, 6; 109-120 1976
- 10) 熊谷高幸：自閉症の謎こころの謎 (認知心理学からみたレインマンの世界) 49-50 ミネルヴァ書房 1991
- 11) 前掲書10) 118-122
- 12) 前掲書10) 110-118
- 13) 十亀史郎・久保義和：自閉症における言語的特徴および発達神経心理学的特徴について児童精神医学とその近接領域 21-1, 38-43 1980
- 14) 前掲書2) 48-58
- 15) 宮脇修：広汎性発達障害における状況画の認知について 名女大紀要第38号 1992
- 16) 前掲書2) 55-56
- 17) 宮脇修：自閉性障害をになっている子どものことばの教育について 言語聴覚障害 第16巻第3号 1987
- 18) 十亀記念事業委員会：第5回十亀記念賞記録 4-8, 40-46 1991
- 19) 自閉症児・者親の会全国協議会：こころを開く No. 16 30-52 1988
- 20) 宮脇修：障害児対策の現場から 厚生1988.5 26-27 (厚生省広報誌) 中央法規 1988